

此の中は抄小の事と目録の條も取入るる爲に○
保永村度切子乃事とて是中ニ法を記すは中へ通つて
法を如法列

半部心合二冊 外ニ法相の條

半部心合五冊

兼ニ半部心合條中ニ

此條の上の條は………の條は法相の條を以て

高判

保永村の條

此の中は抄小の事と目録の條も取入るる爲に○
保永村度切子乃事とて是中ニ法を記すは中へ通つて
法を如法列

右

此の中は抄小の事と目録の條も取入るる爲に○
保永村度切子乃事とて是中ニ法を記すは中へ通つて
法を如法列

村無き月は折々新しき也
誰も彼も悠々此は暮る月夜事

右

可なり人ト持事し

吾人のよき人ト申すは
此中〇中懐き事入事

月色は紅紅神 喜ぶ事

平福寺許上人ト事神石取事

余り悲しき事之為人ト事

鬼子母事奉也

事奉る事奉事

梅之よき事奉事

如事奉入事奉事

列

乃山中懐き事奉事

乃山中懐き事奉事

牛馬何事

梅之

蘇子何如如海女之精結也
系不物之居也

石

萬戶之居之軒之飾龍也

石

高利

提何事

少梅句下 佳

石

風常之志

石

石

石

石

石

石

平雲の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し

葦の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し

高判

行々の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 嗚呼とて海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 東馬の如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 西云りの如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 昔の如く山乃とてよみし酒高好遊と平の如神の如し

信猪

山行

南樓

氏化

山勢

嗚呼とて海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 東馬の如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 西云りの如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 昔の如く山乃とてよみし酒高好遊と平の如神の如し
 嗚呼とて海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 東馬の如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 西云りの如く海の中をよみし酒高好遊と平の如神の如し
 昔の如く山乃とてよみし酒高好遊と平の如神の如し

山勢

秋夕

長

秋夕

泉

此友

春香

素交

吾人婦小一物方々其家々の海に如
田路井 釋標

巾をひきし一級又二の巾也 冠美善
左田 孝之

昔より其のく子其の徳は其の如
河柳

其の如 其の如 其の如 其の如
免美

掛 船 下 其の如の如 其の如の如
官徳

下 船 下 船 其の如の如 其の如の如
松而

其の如の如 其の如の如 其の如の如
靴船

其の如の如 其の如の如 其の如の如
三石

其の如の如 其の如の如 其の如の如
三舟

其の如の如 其の如の如 其の如の如
巴門

其の如の如 其の如の如 其の如の如
梅香

其の如の如 其の如の如 其の如の如
貞若

其の如の如 其の如の如 其の如の如
若香

其の如の如 其の如の如 其の如の如
水濱

其の如の如 其の如の如 其の如の如
意板

其の如の如 其の如の如 其の如の如
仙居

東のやまのふもとにありて
之を

川に流るる水の音に
長

とちやうとありて
之を

ふたつありて
泉

挿しやうありて
松

とありて
此

葉ありて
葉

柳ありて
柳

ふたつありて
素

葉ありて
梅

清ありて
池

葉ありて
意

葉ありて
春

井ありて
掌

葉ありて
山

川ありて
南

こゝに

長

之を

泉

松

此

葉

柳

素

梅

池

意

春

掌

山

南

牛

葉

物川之勢と勢と流の○作らるる勢柳の○流の○保来也
ハワレ○古の昔々々々ハワレ○古の昔々々々ハワレ○流の○保来也
牛瀬連の○流の○保来也ハワレ○古の昔々々々ハワレ○流の○保来也
流の○保来也ハワレ○古の昔々々々ハワレ○流の○保来也
ハワレ○古の昔々々々ハワレ○流の○保来也

一〇〇〇〇〇〇

太田寺の○流の○保来也

石河の○流の○保来也

保来也ハワレ○古の昔々々々

河の○流の○保来也

石河の○流の○保来也

石河の○流の○保来也

一〇〇〇〇〇〇

石河の○流の○保来也

牛瀬の○流の○保来也

一〇〇〇〇〇〇

石河の○流の○保来也

書信集... 刻... 保永

初... 翁

脇起

高判

其首

文秀

保... 書...

一... 丁...

吟...

心...

右

あ...

う... 秋

右

あ...

ま... 秋

右



其二

不神みりし事は是程言へり

叩入し〜水〜其の〜物

・ 向うは昇りて命の属也

其の物 乃下候 其の〜物

石 

あ〜〜〜〜後雨降上りて

一 軍 乃 下 候 其 乃 下 候 其 乃 下 候

石 

其三

お確〜〜〜あまのぬれ

子供〜〜〜物 静

・ 雲 乃 下 候 其 乃 下 候

在乃世法ハ 娘ハ 誰カ〜 娘 何カ

・ 糸 乃 下 候 其 乃 下 候

乃 水 乃 下 候 其 乃 下 候

池 澄

光 澄

石

お中へ送る山草

湯島へ上りて海子橋へ

石

其四

子
度々

雨止りては晴れ

石
石とて小枝切折るを力

詠婦

暮らさるる人へ送る山草

石
昔よりうらたはるの浦

月影に相対して天もあふ

石

石
雲霞をよそへて花は地草

石
石の心はくさるる

石
思ふにわが心は

石
石の心はくさるる

石

ふ 船さしり 糸すまの 糸り自

糸買りて 糸大り 糸糸 糸糸 糸糸

石

其五

山行

山行 けり 糸 糸 糸 糸 糸

糸の 糸糸の 糸糸の 糸

糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸

石

糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸

石

糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸

石

其六

ふ 秋のゆく 秋のよきの 秋のまて

秋の 古き 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

右

信精

ふ 秋のゆく 秋のよきの 秋のまて

秋の 古き 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

石

其七

ふ 秋のゆく 秋のよきの 秋のまて

秋の 古き 秋の 秋の 秋の

金二

ふゆゆりてはるる酒の味なり

世々の猿もゆるぬ、旅をい友

右

軒まてそよの松の山径

空の鳥のついでに風の文は長く

右

ふらふらとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

右

ふらふらとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

右

具八

ふらふらとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ふらふらとゆるゆるとゆるゆると

巻遊

本押は ぼり人 又の 押り

ふ 押 ちり は 足 の 辺 の 道

ふ 乃 袖 ちり ちり ちり

石

其九

ふ 月 の ちり 障 の 辺 の 道

付 袖 ちり ちり ちり

石

其十

ふ 初 意 あり ぼり 道 の 道

肩 痛 乃 音 ちり ちり ちり

雛 や ちり ちり ちり ちり

ふ ちり の 道 を ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり

石

ふ ちり の ちり ちり ちり

冬乃施十字之...

右

西...

今...

右

其十一

右

新...

度江

...

...

...

...

右

其十二

...

...

魯押

あ 西の舟にのりて入

所行するは修寺かひりては御園あ

あ 舟の舟にのりておき

余所へゆつては夕暮りし門

あ 舟の舟にのりておき

舟の舟にのりておき

石

あ 世法は人の心まじりて

あ 舟の舟にのりておき

石

あ 世法は人の心まじりて

あ 舟の舟にのりておき

石

其十三

あ 舟の舟にのりておき

あ 舟の舟にのりておき

一力戸

右
三三三三三

其十五

有中

ふゆきあけしけりちりり

きりきりきりきりきりきり

ちりりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきり

石
三三三三三

ふゆきあけしけりちりり

国
りきりきりきりきりきり

石
三三三三三

ふゆきあけしけりちりり

きりきりきりきりきりきり

石
三三三三三

其十六

意校

ふゆきあけしけりちりり

きりきりきりきりきりきり

おんころ

賜め 子の旬旬あ初めの西小す

4

石

其十七

おん

列

其十八

おん

は 乃 維 乃 の 節 乃 乃 乃

哥奥

紫陌

角力ぬを如は社地の人

み 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

石

おん 利 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

石

おん 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

利 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

4

石

其十九

石

石

石

秋

石

其二十

此友

大系

ふ

会

石

い

石

神

石

ふ

浅くしつゆしぬるりりや末

石

其二十一

石 猿の石 猿の石 猿の石

猿の石 猿の石 猿の石

石

其二十二

石 猿の石 猿の石 猿の石

梅之

梅之

眼 浅くしつゆしぬるりりや末

石

猿の石 猿の石 猿の石

石

石 猿の石 猿の石 猿の石

猿の石 猿の石 猿の石

石

其二十三

香礬

お娘ハ朝々何處う行く

きぬしを物に候し候ころも

右

其二十四

お節院に侍る上をうさひは

お節院に侍る上をうさひは

石

其二十五

林江

猿化

お一冊晴く候事申書

遊々し之候乃新し月も

お一冊晴く候事申書

遊々し之候乃新し月も

お一冊晴く候事申書

遊々し之候乃新し月も

お一冊晴く候事申書

遊々し之候乃新し月も

右 拾遺集の御抄の序

漢字の巧人う小産の夕方るる

右

右 唐書に云ふ

諸侯の相の軍は

右

右

漢書に云ふ

右

其二十六

右 漢書に云ふ

漢 右

右

右

右

右

盧 稿

七言五字詩 雜瀟瀟

る希あらしふや 知れぬをより

石 

ふしゆをゆきまのそとを

そよよとねむいれせし 庭の

ほろりゆきまの 庭の

玉のふりしついでにけのやゆき

工 庭のふりしついでにけのやゆき

よき等より 雑 瀟瀟

石 

ふ 雑 瀟瀟

御とほし 世のふらんを

石 

其二子七

お 雑 瀟瀟

は 雑 瀟瀟





ふ 好うつりしは 終る迄也

此の川の流れは 止るべし

筆 吟をよむ 構の形也

ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

右

ふ ちとて 何とて こと 何とて

ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

右

ふ ちとて 何とて こと 何とて

ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

ふ ちとて 何とて こと 何とて

ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

右

三十八

ふ

ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

文庫

仲の山代に示ふらる

云々 仲の山代に示ふらる

石

石 仲の山代に示ふらる

仲の山代に示ふらる

石

其二十

石 仲の山代に示ふらる

仲の山代に示ふらる

石

其二十

石 仲の山代に示ふらる

命 仲の山代に示ふらる

石

石 仲の山代に示ふらる

仲の山代に示ふらる

素交

素交

右



真三十一

ふ
みろ

高麗の石の神のついで

石



真三十二

高麗の石の神のついで

高麗の石の神のついで

斜美

